

「シンガポール国立大学 短期派遣 参加報告書」

京都大学文学研究科・二年 堀 沙織

▼学習成果

もともと派遣中の課題としていたものは、①(本プログラムの趣旨にもとづく)アジア哲学に関する基本的知識の習得と②(派遣者個人の研究関心にもとづく)ジョン・デューイの認識論哲学の研究であった。①一つめに関しては、二か月の派遣期間中、体系的に学ぶ機会はもてなかったが、NUS および Yale-NUS college の授業や教員・院生らとの交流を通じて、「アジア哲学」に括られる研究の断片を知ることができた。②二つめに関しては、NUS のデューイ研究者(タン教授)とミーティングをしながら、デューイ初期の著作の精読に取り組んだ。もともとは、認識論の教育論に対する含意をみようと、彼の認識論と教育論に関する論じ方(中期)にフォーカスしていたが、初期の著作におけるより詳細な認識論的議論をみる中で、彼の認識論がもっている現代的認識論への示唆(徳認識論との親近性から)について調べてみようといった新しい方針を得ることができた。

さらに、このような当初の課題に関する成果に加えて、「アジア哲学」といわれるものの中で、派遣者個人の研究関心に合致しそうなものについて知れたことも成果といえるかもしれない。たとえば、近年の比較思想における中国古典の取扱いの中には『論語』における「知」の認識論的な分析といったものもあるらしい。将来的に機会があれば取り組みたいと思う。

▼海外での経験

NUS および Yale-NUS College では、非常に興味深い海外経験ができたように思う。そこでは、英米圏の哲学科にひけをとらない西洋哲学の教育環境とアジア圏の固有性を強調するアジア哲学の教育環境が共存しているようにみえた。たとえば具体的に、西洋哲学のフィールドでは、ファカルティのほぼ全員が英米圏の大学院の出身者であるせいか、カリキュラムは英米圏にならっており、英米圏で活躍する研究者の招聘セミナーやトークも活発に行われている。一方で、アジア哲学の重要性が強調されており、ほとんどのファカルティが、西洋哲学とアジア哲学両方にまたがる関心を持っており、院生の研究関心もそのようである。今回の派遣では、以上のような NUS の特徴に触れることができ、NUS がアジア圏の大学としてもっとも存在感があるといわれることが多少理解できたかもしれない。NUS の教育・研究環境を積極的に活用するならば、英米圏の大学では得られない海外経験を通して、視野・見識を十分に広げられる機会があるだろうと思う。

▼プログラム内容

滞在期間中は、上に述べた派遣課題に照らして、次のような活動を行なった。①アジア哲学に関する学習については、受け入れ教官であったガーフィールド教授が Yale-NUS College で開講していた Philosophy and Political Thoughts といった授業に参加するとともに、NUS の哲学科が開催する講演会・セミナー等に参加した。②その他、個人の研究課題に関しては、タン教授(デューイ研究)やガーファート教授(科学哲学)とミーティングを行うなどした。

▼進路への影響

今回の派遣の中で、シンガポールの哲学状況を垣間見ることができたことは、進路への影響という観点からみても、有意義だったと思う。再度、本プログラムに応募したりであるとか、博士課程修了後、シンガポールの教育・研究ポストに応募することなども考慮に入れられたらと思う。

▼その他

NUS 及びシンガポールでは、過ごしやすい気候の中、清潔で安全・快適な住環境と豊かな食文化を享受することができ、理想的な生活環境が得られた。そのため、何ら問題なく、現地の生活に適應することができた。